

The Rising Of The Primis —プリミス達の成り上がり—

トモヤムクン9

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドクターモンティによつては古の時代へと転送させられ、無限ループに閉じ込められた4人の軍人 アメリカ人のタンク・デンプシー、ロシア人のニコライ・ベリンスキイ、日本人の正樹武雄、ドイツ人のエドワード・リヒトーフェン

この時代で彼らはアポシコンを倒した英雄として称えられ、終わることのないゾンビ狩りの日々へと閉じ込められていた。

そして今、四聖武器書を見つけてしまったことで、彼らの運命はさらに狂うことになる。

6 R R
o o
u u
n n
d d
2 1
:
S プロローグ
u
m
m
o
n
s
a
n
o
t
h
e
r
w
o
r
l
d
1

目次

R o u n d 　1 : プロローグ

世界が元素115と呼ばれる物質によつてゾンビで蔓延し、宇宙を元ある形に直すために旅をしていた四人の軍人、タンク・デンプシー、ニコライ・ベリンスキー、正樹武雄、エドワード・リヒトーフエンはついに全ての元凶であるアポシコンとその親玉であるシャドウマンを討ち倒すことに成功した。

しかし、宇宙全体を元に戻してほしいと依頼した張本人であるドクターモンティは、彼ら4人が存在し続けていることがパラドックスとなり、ゾンビが存在しないこの平和な世界を壊してしまうと考えた。

そして、モンティは4人をはるか古の時代へ送つたのだった。

・・・そして過去の世界に飛ばされた4人はアポシコンとの大戦争の後、とある城の大図書館に来ていた。

4人の男たちは図書館に隠された階段を下りていき地下の研究室に入つていった。彼らの格好は鎖帷子の鎧と布製のチュニックに、赤と白の円、そして太陽のシンボルが描かれていた。手には茶色の革製のガントレットがはめられていた。

「リヒトーフエン、そいつは間違いないのか？」一人の男がアメリカ訛りで尋ねた。

彼の名前はタンク・デンプシー。白人で、明るい茶色の髪に口ひげを生やしていた。顔には多少の汚れと乾いた血の他に傷跡はなかつた。

「そうだデンプシー。これでやつと元の生活ができるようになる。だが、まだやるべきことがある。そのための装置を取りに来たのじや」と、ドイツ語訛りの男が答えた。

彼の名前はエドワード・リヒトーフエン。白人で髪は黒く小さな口ひげを生やしていた。右頬には大きな傷があり、乾いた血と泥が付いていて青い目をしている。

「何と言おうとドイツ野郎、お前のことを信用したわけじゃねえからな」

3人目の男 ニコライ・ベリンスキーガ、ロシア語を強調した声で言つた。彼もまた白人で青い目をしており、ドワーフの様な茶色の濃いあごひげと口ひげを生やし、刈り上げの髪型をしていた。

「心配するなニコライ。リヒトーフエンは過去に嘘をついたことがあるが、それは我らにやるべきことをやらせるためだつた。この世界に来て以来、彼は真実を語つてたではないか」

最後の男、正樹武雄は日本語で答えた。彼はアジア系で、黒髪を束ねていた。小さなあごひげと口ひげを生やしていて茶色の目をしている。

ロシア人のニコライは、「わかってるつての武雄」と答えた。

ドイツ人のリヒトーフエンは、研究室の中を歩き回り自身の発明品を探していた。他の3人は、入り口を気にしながら周囲を見回していた。

そしてデンプシーは待つのが退屈だつたため周りを散策し始めた。本棚周辺を見ていると、突然デンプシーの頭上に何かが落ちてきだ。

頭をさすりながら落ちた物を見ると以前リヒトーフエンが持つていたクロノリウムに似た革製の本がそこにあつた。

「おい、リヒトーフエン」

しばらくするとデンプシーが大きな革製の本を持つてリヒトーフエンに向かつてきた。

「コイツは以前話してたあの邪悪な本に似ている気がする。持つて行く方がいいんじやねえか？」

「見せてみろ」

リヒトーフエンは本を受け取り、彼はその本を見ながら目を細めた。

「四聖武器書？クロノリウムとは違うな。手に入れた覚えもない。ワシが装置を探している間にお前たちが読んでくれないか」

と言つてから、その場にいるデンプシーと武雄を見た。

「武雄、代わりに頼む」

と言つて、武雄に本を渡した。彼はタイトルを見て目を細めた。

「貴殿が題名を読めたことに驚いたぞ。日本語をこんなに流暢に読めるとはな」

武雄は冗談半分で言うと。

「何を言つているんぢや武雄？ それはドイツ語で書かれておるだろ？」

トリヒトーフエンが答え、彼は武雄に歩み寄つた。

デンプシーも2人の肩越しに「俺にも見せてくれ」と言つた。

「ドク、それに武雄、一人とも間違てるぜ。どうみても英語で書かれているぞ」

「そんなバカな…。おーい、ニコライ！」

リヒトーフエンが声をかけると角を曲がつた所からニコライが顔を出した。

「この本のタイトルは何語で書いてある？」リヒトーフエン人が本を手渡して質問した。ニコライはタイトルを見てから返した。

「ロシア語だなこりや。どういうことだ？」ニコライが質問する。

「ワシにもわからない。見る者によつて文字が変わるなどと…この本にはその答えが書いてあるかもしけない」

「じゃあ、開けてみるとするか」とデンプシーは答えた。

「ちよ待てよ、リヒトーフエンが言つていた装置を探さなくていいのか」

「そんなに急がなくても大丈夫じや。せいぜい気晴らし程度に読むとしよう」

ニコライの疑問に対してもリヒトーフエンはそう答え、本を開いた。
『終末の災厄をもたらすの波』に襲われた世界で、4人の勇者が召喚され、それぞれが伝説の武器を振るう。剣、弓、槍、そして盾だ』とリヒトーフエンは読み始めた。

「待て、盾だと？ 盾が武器なのか？」 デンプシーが尋ねた。
「静かにしろデンプシー！」
リヒトーフエンは言つた。

「ではあらためて

リヒトーフエンがページをめくり読み続けると突然手を止めてしまつた。

「どうした、リヒトーフエン？」

武雄は、ドイツ人の肩越しに聞いた。

「なんだ、これはどういうことなんだ？」

他の2人は、リヒトーフエンが開いているページを見た。

「ありえない」

「何かの間違いやねえのか？」

そのページには、4人の英雄が丘の上に立ち、応援する騎士たちに囲まれている様子が描かれていた。それぞれが鎖帷子の鎧を身につけ、胸にはシンボルマークが描かれている。それぞれの手には大きな杖が握られていた。絵の四隅には顔が描かれていてた。そう、自分たち四人の顔がそこに描かれていたのだ。そしてページの題名にはこう書かれていた

【PリRミIミMスI】と

「どういうことだ？」

ニコライは尋ねた。

「なぜワシらのことが書かれているのだ」

リヒトーフエンが驚く。

「おいおい俺たちがやつたことがもう本になつてんのか？どう考えたつておかしいだろ…」

デンプシーは半信半疑な感じで言つた。

「読めば何かわかるやもしれない」

武雄が言い、リヒトーフエンから本を取つた、リヒトーフエンは抵抗することなく手放した。

『しかし、もし世界が本当に危険な事態に面したら、4人の勇者の召喚されると同時に、4人の英雄が呼ばれることになる。彼らはそれぞれエレメンタルクリスタルと呼ばれる遺物を使い、四聖勇者を助け、災厄の波に立ち向かうだろう…』

そう言いながらページをめくつていき、勇者に関する話が終わつたあたりでおかしなことが起こつた。続くページが白紙になつていた。

ニコライ「なんだこれ。手抜きじゃねえか」

すると突然本が光輝き、電気を帯び始め4人の周りに風が吹き荒れ始めた。

「何だ！この光は！」

「あ：何かデジヤヴを感じる…」

「オイオイマジかよ！まだどつかに飛ばされて上空から落とされるんじゃねえだろうな！」

「早くここから立ち去れねば！」

リヒトーフエン達は声を上げ、急いで研究所を出ようとしたが、見えない壁に阻まれ4人は足を止めてしまう。

そして4人はそれぞれのポケットの中で何かが光つていることに気がつき、その中から光るクリスタルを取り出した。

これはアポシコン大戦の時に使用した武器『エレメンタルスタッフ』の動力になる結晶であり、今後何かあつた時のためにそれぞれが持つていたものだ。

デンプシーの水晶は紫に、ニコライの水晶は赤に、タケオの水晶は青に。そして、リヒトーフエンのクリスタルは、緑色に光っていた。

「なぜだ、ワシらは…」とが言いかけたところで、本から突然光が放たれ遮られた。4人を包み込んだ光が消えると、そこには4人の軍人の姿はなかつた。

Round 2 : Summons another world

「なんてことだ！勇者が8人も召喚されたぞ！？」
「こんな事例聞いたことがない。一体どうすればいいのだ」
(……ん？なんだ、誰の声だ？)

謎の本から出てきた光に包まれて氣を失っていた俺『タンク・デンプシー』は意識を取り戻し、床に突つ伏している身体を起こし周りを見渡した。

辺りを見てみると、俺が立っている床付近には謎の紋様が光りながら浮かんでいて、石でできた壁とローブを着た集団に周りを囲まれていることが分かった。

他には、紋様が描かれた床周辺に同じくの謎の光に巻き込まれた二コライ、武雄、リヒトーフエンが床に突つ伏していることが確認でき、その奥にも4人誰かいることが確認できる

(どこだっこ、俺達さつきまで図書館にいたはずだよな。この聖職者みたいな奴らは何なんだ？)

(それに俺たちの服装がどういうわけか旅をしていた時の軍服に戻つてやがる…ってことは…やはり武器もいつものになつてるな)
M 19 11

そう思い警戒しながら俺はまた辺りを見渡すと、どうやらリヒトーフエン達が目を覚ましたみたいだ。

「はあ…ここは何処なんじや？」

「先ほどいた部屋とは異なる場所…まさか我らは何処かへ転送されたというのか」

「ウーン…つハ!?」これはどこ？俺は誰？じゃねえマジでどこなんだよ
!?

「落ち着けニコライ。おいそこのローブ野郎、お前らは誰なんだ」
各々が発言するがこのままじや埒があかないでの俺は近くにいたローブ男に声をかけた。

「勇者様方、どうかこの世界をお救いください！」

『・・・は?』

「…なんだつて? 勇者?」

「それはどういう意味ですか?」

発言した言葉に俺たちが戸惑っていると弓を持った男が質問した。
「色々と込み入った事情がありますが、ご理解していただける言い方
ですと、勇者様達を古の儀式で召喚させていただきました。この世界
は今、存亡の危機に立たされているのです。勇者様方、どうかお力を
お貸しください」

ローブ男達が深々と俺達に頭を下げる。

「いきなり助けてつて言われてもな…」

「まあ話だけなら…」

「嫌だな」

「そうですね」

「元の世界に帰れるんだよな? 話はそれからだ」

盾を持つた男が話を聞こうと喋っている最中、遮るように剣・弓・
槍の男が口を挟んだ。

こんなよくわからん連中に囮まれていてるのに随分と余裕そうだな、
肝が据わっているのかただ馬鹿なだけなのか。

話だけでも聞けよ…まあ結果は変わらんだろうが、変に口を出さない
方がいいな。

「人の同意なしでいきなり呼んだ事に対する罪悪感をお前らは持つて
んのか?」

剣を持つた男、一見高校生くらいの奴がローブを着た連中に剣を向
ける。

「仮に、世界が平和になつたらポイつと元の世界に戻されではタダ働
きですしね」

「確かに、あり得なくない話だな」

弓を持つた奴の意見に同意だけしてローブ男達を睨みつける。俺
たちに関しては元の世界に戻されるどころか文字通り消されかけた
からな。

「こつちの意思をどれだけ汲くみ取ってくれるんだ? 話によつちや

俺達が世界の敵に回るかも知れないから覚悟しておけよ」

おいおい現状不利な位置にいるのによく強気でいられるな。

「ま、まずは王様に謁見して頂きたい。報奨の相談はその場でお願いします」

「……しようがないな」

「ですね」

「ま、どいつを相手にしても話はかわらねえけどな」

「あーあ、俺たちまためんどくさい事に巻き込まれちまつたよ…なあ武雄、隙を見てここからおさらばした方がいいんじやね?」

「二コライ、ここは大人しくついて行こう。今回ばかりは今までの旅のよう上手く行くとは思えん」

ローブ男の代表が扉を開け付いてくれと案内し、盾以外の3人は偉そうな態度をしながら付いて行き、俺たち4人も不本意ながらもついて行くことにした。

「リヒトーフエンこれはどういうこと状況だ。お前なら何か知っているんじやねえのか?」

案内されてる道中で俺はこういう状況に詳しいであろうリヒトーフエンに声をかけた

「デンプシー、ワシに聞けば何でも分かると思つてゐるだろうが今回に関しては全く分からんな。そもそもこの状況を作り出したのは貴様じやからな?」

「それは悪かつたつて…だからお前に聞いているんだろ?」

「そう慌てるではない、ワシに聞くよりこれから会う王に聞いた方が早いかもしけんぞ」

そうリヒトーフエンとやり取りしている内に謁見の間に辿たどりついた。

「ほう、こやつ等が古の四聖勇者達と謎の兵士達か」

謁見の間の玉座に腰掛ける偉そうな老人が俺達を見るなり呟つぶやいた。

どの世界でも王様つてのはこんな感じの奴しかいないな。

それに同席している貴族達からの視線に違和感を感じる、勇者として歓迎してるようには思えない。

今気にして仕方ないので俺たち4人は王に対する作法として跪くことにした。

「ワシがこの国の王、オルトクレイ＝メルロマルク32世だ。勇者達よ顔を上げい」

俺たちは姿勢を元に戻す。

「さて、まずは事情を説明せねばなるまい。この国、更にはこの世界は滅びへと向いつつある」

何だ？ここもゾンビやアポシコン共が押し寄せてんのか？と思いつつ話を聞く。

王の話をまとめるところだ。

現在、この世界には終末の予言つてのがあつて世界を滅ぼす「波」という災厄を勇者たちが食い止めなければならぬ。

それで予言通り龍刻の砂時計という道具の砂が落ちだしたらしいのだ。

この龍刻の砂時計は波を予測し、一ヶ月前から警告し一ヶ月ごとに災厄が訪れることだ。

当初、この国の住民は予言を放つておいた結果、予言通り災厄が舞い降りたと。

次元の亀裂がこの国、メルロマルクに発生し、凶悪な魔物が大量に亀裂から発生した。

その時は辛うじて国の騎士と冒険者で退治することが出来たが、このままでは次の波を乗り切れないと考えた結果この国のトップ達は伝承に乗つ取り、勇者召喚を行つた…ということらしい。

ちなみに言葉が分かるのは四聖勇者が所持している伝説の武器に能力があるからだとか。

ん？だとしたらなんで俺たちはこの世界の言葉が分かるんだ？四聖武器は剣・槍・弓・盾のことで、その伝説の武器を持つてんのが隣に青年4人であつて俺たち4人はさつきの話に出てきた武器は持つ

ていなぞ。

「それで…ワシら8人がその勇者として召喚されたわけか？じやが貴公の話によれば勇者はそこの4人であろう。ならばワシらは一体何として召喚されたんじや？」

「それはワシにも分からん、何せこのような事態は今まで無かつたからな、勇者と共に召喚されたのだから何もないことはないだろうが：それについては後で言及するとしよう」

リヒトーフエンが王の話に対して質問をした後、次に声を上げたのは剣を持った男と他3人だつた。

「それで、召喚された俺達にタダ働きしようと？」

「都合の良い話ですねほんと」

「…そうだな、自分勝手としか言いようが無い。滅ぶのなら勝手に滅べばいい。俺達にとつてどうでもいい話だ」

「確かに助ける義理も無いよな。タダ働きした挙句、平和になつたら『さようなら』なんてされたらたまつたもんじやない。というか帰れる手段があるのか聞きたい。その辺りどうなの？」

「ぐぬぬ……」

帰れる手段か：盾の青年が言つたことは確かに気になるな、例え世界が平和になつても元の世界に帰る術が無く永住ですなんてことになつたらたまつたものではない、最悪用済みとして殺される可能性もある。

すると王の臣下の者が前に出て話し始めた。

「もちろん、勇者様方には十分な報酬を差し上げる予定です。他に援助金も用意できておりまでは是非、勇者様方には世界を守つて頂きたく、その為の場を整える所存です」

「へー……まあ、約束してくれるのなら良いけどさ」

「俺達を飼いならせると思うなよ。敵にならない限り協力はしておいてやる」

「……そうだな」

「ですね」

さりげなく帰る手段についての話を逸らしやがつた…。

たとえ俺が帰る手段について追及してもまた白を切られるだろう。

「では勇者達そして兵士達よ。それぞれの名を聞こう」

そうしていると一番左側にいた剣の勇者から順番に槍・弓・盾が前に出て自己紹介始めた。

「俺の名前は天木鍊だ。年齢は一六歳、高校生だ」

「じゃあ、次は俺だな。俺の名前は北村元康、年齢は二一歳、大学生だ」

「次は僕ですね。僕の名前は川澄樹。年齢は一七歳、高校生です」

「次は俺だな、俺の名前は岩谷尚文。年齢は二十歳、大学生だ」

「…では次」

何だこの王様、ナオフミという男の自己紹介になつた途端に興味がなさそうな態度をしやがつた？

まあいい次は俺たちの番か。

「俺はアメリカ海兵隊所属タンク・デンプシー伍長だ」

「俺は元ロシア軍所属ニコライ・ベリンスキー軍曹だ。今は赤軍に所属している。よろしくな」

「私は大日本帝国軍所属、正樹武雄大尉である」

「ワシはドイツ軍第9335部隊所属エドワード・リヒトーフエンだ。主に兵器や医学の研究をしている」

ざつくりと俺の自己紹介をする。歳も言うべきなのだが、115の影響でどうも自分の年齢を思い出せない。

それと俺達以外の4人が驚いているな。軍人だつて名乗つたからか？

「ふむ。レンにモトヤスにイツキ、それとタンクにニコライにタケオにエドワードか」

「王様！俺、俺を忘れてるって！」

「おおすまんな。ナオフミ殿。何分人が多いものでな」

「これもしかしながらこの王様ワザとやってるのか？。もしそうならさつき尚文の時だけ妙な反応をしたのも納得がいく。

「では名前を確認したところで皆の者、己のステータスを確認し、自らを客観視して貰もらいたい」

「ステータス？」

「ステータスって何だ？」

「すまぬが、そのすていたす？とはどのようにご覧になれるだろうか」

武雄が王様に尋ねた。

「何だお前等、この世界に来て真っ先に気が付かなかつたのか？」

鍊が俺達を情報に疎い連中だと呆れたように言う。

「どうか何だその馬鹿にしてると言わんばかりの表情は、喧嘩売るのが得意なのか？」

「なんとなく視界の端にアイコンが無いか？」
「ん？」

言われるまま、視界の端を見ると何か妙に自己主張するマークが見えた。

「それに意識を集中するようにしてみろ」

「気に障るが言われた通りにすると、軽い音と共に視界に大きく文字が表示された。

タンク・デングルシード・0

職業 見捨てられた英雄 Lv1
武器 M1911（ハンドガン）

エレメントクリスタル（英雄の武器）

コンバットナイフ

装備 フラググレネード

特殊武器 O V E R K I L L L v 1

異世界の軍服

スキル 装備・特殊武器換装 召喚の鍵 蘇生+（ラストスタンダード）
魔法 無し

ステータスはこれの事か。何だか近未来つて感じな機能だな。
何々：レベル1!?ゾンビどもと散々戦ってきたのにレベル1なのかな
よ！

ということは…ああ、やつぱり、畜生いつも通り武器もハンドガン
とナイフ以外持つてないか…いや、他に武器を持つてるみたいだ、何
？杖にはめ込んでたクリスタルが武器として杖に入っているだと？
これ単体で使えるのか？

それと特殊武器はラグナロクDG-4やアナイアレイターとかの
事か。毎回作つたり、ミステリーボックスから引き当てないと駄目
だつた今回は最初から持つてているのか。

それに自分の健康状態もわかるなんて中々便利な機能だ。他にも
スキルもあるが、後で確認しておこう。

「なるほど網膜に直接投影されておるのか？。実に興味深い…」

リヒトーフエンはこの機能に興味津々だな

「何だよレベル1つて、プレステージ回してなかつたか俺達？」

「何の話をしているのだニコライ」

「L v 1ですか……これは不安ですね」

「そうだな、まともに戦えるかどうか分からねえな」「
ていうかなんだコレ」

「勇者殿の世界には存在しないので？ これはステータス魔法という

この世界の者なら誰でも使える物ですぞ」

「そうなのか？」

「この奇妙なモノが誰でも使えるとは……こも摩訶不思議な世界だ」

この世界じゃ常識つてことに俺達は驚いた

肉体を数値化して見ることが出来るのは中々に便利だ。

「それとおぬし達兵士に確認してもらいたいのだが、職業は何になつておるか言つてみたまえ」

「俺たちが勇者かどうかってことか？俺のは『英雄』つて書かれてる、武器にもな、ニコライお前の方はどうだ？」

「俺も同じく英雄になつてるぞ」

「我也同じく」

「ワシもじやな。それにしても英雄などとは…一体何を指しているじゃろうな」

リヒトーフエンが考える素振りをしている。

「なるほど…勇者ではないが同等の力を期待できそうじやな…」

王様も確認が取れたことで満足しているようだ、すると他の勇者がステータスの数値について聞き始めた。

「それで、俺達はどうすれば良いんだ？ 確かにこの値は不安なんだが」

「ふむ、勇者様方にはこれから冒険の旅に出て、自らを磨き、伝説の武器を強化していただきたいのです」

「強化？ この持つてる武器は最初から強いんじやないのか？」

「いいえ。召喚された勇者様が自らの所持する伝説の武器を育て、強くしていくそうです」

「その武器が武器として役に立つまで別の武器とか使えばいいんじやね？」

元康が槍を回転させながら意見する。

「そこは後々片付けて行けば良いだろ。とにかく、頼まれたのなら俺達は自分磨きをするべきだ」

「錬がそういうて場をまとめた。

「つつーことはよ、今後俺達8人で行動をするのか？」

「お待ちください勇者様、英雄様方」

「ん？」

ニコライが話していると大臣が会話に遮ってきた。

「勇者様方は別々に仲間を募り冒険に出る事になります」

「それは何故?」

「はい。伝承によると、伝説の武器はそれぞれ反発する性質を持つております。まして、勇者様方だけで行動すると成長を阻害すると記載されています」

「本当かどうかは分からぬが、俺達が一緒に行動すると成長しないのか?」

そう話していると視界に文字が浮かんできた。

他の奴にも出てきたようで目で追っている。

『補足、伝説の武器を所持した者同士で共闘する場合。反作用が発生します。なるべく別々に行動しましょう。』

確かに伝説の武器に関しては書かれているが肝心の「英雄の武器」については何処にも書かれていなかつた。

「ほんとみたいだな…」

尚文がつぶやく

「なあナオフミだつたか? そつちに英雄の武器について何か書いてあるか?」

俺は気になつて尚文に聞くことにした。

「え? そんのはこつちには出てないけど…ヘルプには書いてないのか?」

「ああ、英雄の武器だと反作用が発生する何てことは書いてなかつたから少し確かめたかつたんだ」

すると俺達の話を聞いてニコライ達が寄ってきた。

『デンプシーもか? 俺のヘルプも伝説の武器のことは書いてあつたが『英雄の武器』については書かれてないぜ』

「我のところも書かれておらん」

「同じくワシもじや。まさかワシらだけ例外ということか?」

俺達4人だけ例外つてのも何かおかしい気がするが…。」

「それだつたら2人ずつで組めるんじやないか?」

話を聞いていた元康が提案したが、それに王が反応する。

「待ちたまえ、残りはワシが仲間を用意しておくとしよう。なにぶん、今日は日も傾いておる。勇者殿、今日はゆっくりと休み、明日旅立つのが良いであろう。こちらは明日までに仲間にになりそうな逸材を集めておく

「ありがとうございます」

「ああ、助かる」

「ありがたきお言葉」

それぞれ王に感謝し、結果分からず仕舞いのままその日は王様が用意した来客部屋で俺達は休むこととなつた。